様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目： 若手研究（B）
研究期間： 2006～2008
課題番号： 18700495
研究課題名（和文）身体文化の身体教育学的研究―21 世紀の新たな教育文化の創造に向けて―

研究課題名（英文）Philosophical Study on the Cultural and Educational Aspects Of Human Body

研究代表者
木庭 康樹（KINIWA KOHKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・助教
研究者番号：60375467

研究成果の概要：本研究では、21 世紀の新たな教育文化の創造に向けて、まず、身体彫刻やボディアート，スポーツ映像や身体文学、伝統舞踊などの身体表現に見られる感性教育的効果を考察し、それらの身体文化が学習者の感情表現を豊かにするだけでなく、生活世界におけるポジティブな身体認識にも寄与することが明らかとなった。また、現在最もポピュラーな身体運動文化であるスポーツについては、スポーツ運動とスポーツ行為の区別およびスポーツ文化の教材化の方法について、それらの全体像を提示することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,400,000	0	1,400,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	210,000	3,710,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学
キーワード：身体文化・身体教育・スポーツメディア・教育媒体・感性教育

１．研究開始当初の背景

これまで、スポーツや武道などにおける身体の運動性に着目した身体運動文化研究は、いくつか試みられているが、ボディ・アートやスポーツメディアなどにおける身体の形態性や媒介性に焦点を当てた-広い意味での-身体文化研究は、未だほんとんどなされておらず、まさにこの点にこそ、本研究の独創性があると考えられた。また、我が国における身体文化の人文社会科学研究は、研究の対象や方法に関してまだ統一がとれておらず、とりわけ、身体文化の一つであるスポーツについての自然科学研究に比べ、社会的な認知度も低いのが現状であった。さらに、人間の身体的諸能力のほとんどは、身体教育（体育）によって作り出される人為的所産であるが、身体文化の人文社会科学研究では、自然科学的な身体観や実験的な手法に依拠するケースが、数多く見受けられた。この傾向は、他の東アジア諸国やヨーロッパにおいても顕著であり、海外の場合も、日本の場合と同じく、人間の身体的諸能力が人為的所産である

という考え方も希薄であった。これに対し、本研究の意義は、人文社会科学に固有の概念論的もしくは思想論的方法を用いることで、体育学の内部にそれ独自の位置を見出すことができるというところにあった。そして、哲学プロパーにおいても、体育哲学やスポーツ哲学への関心も高まっており、これらのニーズに応え、プロパー領域に対して、現在の体育学の研究成果をアピールする上でも、本研究の意義と役割は大きいと考えられたのである。

２．研究の目的

本申請の「身体文化の身体教育学的研究−21 世紀の新たな教育文化の創造に向けて−」は、人間の身体を通して展開される文化を、身体教育（体育）の観点から人文社会科学的に考察することを企図している。現在我が国でも、スポーツやダンス、武道などにおける身体運動から、纏足やコルセットなどの身体変工、日常の身振り手振りといった身体所作まで、身体文化に関する人文社会科学的研究は、数多く行われているが、それらの研究は、人間の身体の運動面にのみ、焦点が置かれていたり、近代国家や資本主義社会を批判的に検討するために行われていたりすることが多い。さらに、余暇としてのスポーツ活動の普及や、学校体育における運動部活動から地域総合型スポーツクラブへの移行等に伴い、スポーツを中心とした身体文化の伝承およびその発展の仕方もまた、様変わりしつつある。しかしながら、身体文化の伝承および発展には、学校体育であれ、社会体育であれ、スポーツ教育であれ、身体教育（体育）という人為的な営みが不可欠なものとなっているはずであり、この身体教育を通じてこそ、身体文化は、人間の身体を多面的に形成し、人間の感性的能力を向上させる手段となりうるのである。すなわち、〈本研究の目的〉は、先に挙げたような身体運動文化のみならず、身体彫刻やボディアート、スポーツ映像や身体文学などをも含む−広い意味での−身体文化を、そうした身体の多面性と感性的能力の向上という観点から総合的に把握し、身体教育の新たな側面を見出すことである。

３．研究の方法

本研究の研究方法については、以下のような研究内容に対応した方法を用いた。

a）身体文化の運動と形態

→プラトンの身体論，および，ジンメルやカッシーラーの文化哲学からの検討

b）身体文化の受容と表現

→プラトンの舞踊論やミーメーシス論，ランガーの芸術哲学による考察

c）身体文化の遊戯性

→ホイジンガの遊戯論の再考

d）身体文化の教育性

→プラトンの教育論の体系的考察

４．研究成果

本研究の初年度である平成 18 年度においては、まず、研究代表者が、平成 18 年の 7 月（於：広島大学）と 8 月（於：弘前大学）にそれぞれ国内研究会を開催し、本研究の全体構想の提示およびプラトンにおける教養教育と身体についての研究発表を行った〔第一回および第二回国内研究会・参加者：木庭康樹（広島大学）、高根信吾（富士常葉大学）、河野清司（中京女子体育大学）〕。また、平成 18 年の 7 月（於：箱根静雲荘）には、韓国釜山大学の権氏らとともに日韓の体育哲学およびスポーツ哲学の現状について意見交換を行い、日韓における「体育」と「スポーツ」の概念的混同やスポーツによる国際交流の重要性などを再確認することができた〔第一回海外研究会・参加者：木庭康樹（広島大学）、高根信吾（富士常葉大学）〕。さらに、平成 19 年 3 月（於：アテネオスカーホテル）には、オックスフォード・ブレイスノーズ大学の T.K.ヨハンセン氏（平成 17 年 10 月～平成 19 年 10 月までギリシャに在外研究中）に対して、本研究の全体構想を提示し、プラトン・アリストテレスの身体論に関する論文発表を行い、同氏と古代ギリシアにおける身体論研究について意見交換を行った〔第二回海外研究会・参加者：木庭康樹（広島大学）、高根信吾（富士常葉大学）〕。そして、同年 3 月には、アテネ、デルフィ、オリンピア、カランバカそれぞれにおいて、古代ギリシア競技に関する史跡・博物館の調査および研究資料の蒐集を行った。そして、ギリシャでの研究調査の結果、古代ギリシア競技に関する調査資料および研究資料を充実させることができた。なお、そのほかの研究業績として、本年度の科研費補助金の助成による学術論文「プラトンの運動競技論序説―スポーツ概念のギリシア的把握―」を 1 編公表することができた。

次に、本科研費研究の二年目である平成 19 年度は、まず、研究代表者が、平成 19 年 9 月の第 58 回日本体育学会（於：神戸大学）において、「身体論への多元的アプローチ(1)身体論の系譜学」（体育哲学専門分科会企画 A）と題したシンポジウムを企画・運営し、さらに、自らもその演者の一人として「身体論の淵源：古典期ギリシアの身体論―プラトンを中心に―」というテーマで研究発表および意見交換を行い、哲学的身体論の歴史的系譜やスポーツにおけるポジティブな身体認識を明らかにした〔司会：佐藤臣彦（筑波大学）、演者：木庭康樹（広島大学）、樋口聡（広島大学）、山口一郎（東洋大学）〕。

また、平成19年の11月には、華南師範大学の周愛光氏らとともに海外研究会（於：華南師範大学）を開催し、さらに、同時期に行われた国際研究集会（THE 3rd INTERNATIONAL FORUM OF SPORT-FOR-ALL）において、研究代表者が、「社会体育と身体性」というテーマで研究発表を行い、ギリシア哲学の観点から国家社会における体育の理念とその理想的な身体像を明らかにした〔第一回海外研究会・参加者：佐藤臣彦（筑波大学）、樋口聡（広島大学）、新保淳（静岡大学）、木庭康樹（広島大学）、周愛光（華南師範大学）ほか〕。なお、そのほかの研究業績として、本年度の科研費補助金の助成による学術論文「プラトン哲学におけるエウエクシアーとは何か？―ギュムナスティケーが目指すべき身体の状態について―」等を3編公表することができた。

そして、本科研費研究の最終年度である平成20年度は、まず、研究代表者が、平成20年7月の日本体育学会体育哲学専門分科会（於：箱根静雲荘）において、「スポーツのゲーム構造論に関する研究―サッカーのゲーム分析のための原理論構築に向けて―」というテーマで研究発表を行い、サッカー文化を事例にしつつ、身体文化としてのスポーツのゲーム概念についての検討を行った。その結果、身体文化として「身体運動競技（スポーツ）」は、「比較関数」によって表わされる基底詞としての「競技」に、身体教育によって生成する「能力的身体性」が限定詞として加わってできたものであり、個々のスポーツゲームでは、ルールによって定められた競技目標にもとづく身体の使用がなされていることが明らかとなった。また、同じく7月には、筑波大学体育科学系において本科研費研究の最終年度成果発表会を開催し、スポーツ運動とスポーツ行為の区別および身体運動文化の教材化の方法について、それらの全体像を提示することができた。さらに、7月の日本体育学会体育哲学専門分科会で行った研究発表の原稿を一部修正し、本年度の科研費補助金の助成による学術論文「サッカーのゲーム分析のための原理論構築に向けたスポーツのゲーム構造論に関する研究―『身体運動競技（スポーツ）』の基底詞としての『競技』概念の検討―」が「体育・スポーツ哲学研究」に掲載されることとなった。なお、今後の課題は、同研究発表の後半部分に当たる「身体運動競技（スポーツ）」の限定詞としての「身体運動」概念の検討を行っていくことである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

①木庭康樹，田井健太郎，上田丈晴，沖原謙（2009）サッカーのゲーム分析のための原理論構築に向けたスポーツのゲーム構造論に関する研究―「身体運動競技（スポーツ）」の基底詞としての「競技」概念の検討―．体育・スポーツ哲学研究，査読有，31（1）：（平成21年6月）印刷中．

②木庭康樹（2008）身体論の淵源：古典期ギリシアの身体論―プラトンを中心に―．体育哲学研究，査読無，38：87－98（平成20年3月）．

③木庭康樹（2008）プラトン哲学におけるエウエクシアーとは何か？―ギュムナスティケーが目指すべき身体の状態について―．体育哲学研究，査読有，38：1－14（平成20年3月）．

④木庭康樹（王水泉訳）（2007）社会体育与身体性-柏拉图哲学中国家社会与体育的理念-．体育学刊（JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION），査読有，14（9）：24-27（平成19年12月）．

⑤木庭康樹（王水泉訳）（2007）社会体育与身体性-柏拉图哲学中国家社会与体育的理念-．THE 3rd INTERNATIONAL FORUM OF SPORT- FOR-ALL PAPERS，査読無，3：165-174（平成19年11月）．

⑥木庭康樹（2007）古代ギリシアにおけるプラトンの身体論―教養人の身体とは何か―．体育哲学研究，査読無，37：97-106（平成19年3月）．

⑦木庭康樹（2007）プラトンの運動競技論序説―スポーツ概念のギリシア的把握に向けて―．スポーツ史研究，査読有，20：95-108（平成19年3月）．

〔学会発表〕（計7件）

①木庭康樹（2008）スポーツのゲーム構造論に関する研究―サッカーのゲーム分析のための原理論構築に向けて―．日本体育学会体育哲学専門分科会夏期合宿定例研究会（平成20年7月19日　於：箱根静雲荘）．

②木庭康樹（2007）社会体育与身体性-柏拉图哲学中国家社会与体育的理念-（社会体育と身体性―プラトン哲学における国家社会と体育の理念―）．THE 3rd INTERNATIONAL FORUM OF SPORT-FOR-ALL（平成19年11月2日　於：華南師範大

学、中華人民共和国)

③木庭康樹 (2007) 身体論の淵源：古典期ギリシアの身体論―プラトンを中心に―. 第 58 回日本体育学会体育哲学専門分科会企画シンポジウム A「身体論への多元的アプローチ（1）身体論の系譜学」(平成 19 年 9 月 7 日　於：神戸大学).

④Kohki Kiniwa, Shingo Takane (2007) Theory of Human Body in Plato's Philosophy―Systematic Consideration on the Concept of *Soma*―. JSPS (Japan Society for the Promotion of Science) Grants-in-Aid for Scientific Research 2006 "Philosophical Study on the Cultural and Educational Aspects of Human Body" Discussion on the Plan for 2007 (March 18th, 2007, Hotel Oscar Athens).

⑤木庭康樹 (2006) わが学問と親科学について、そして体育学とは？. 第 57 回日本体育学会組織委員会企画〈大学院セミナー〉(平成 18 年 8 月 19 日　於:弘前大学).

⑥木庭康樹 (2006) これまでの研究経歴と学位取得までの流れ「古代ギリシアにおけるプラトンの身体論―教養人の身体とは何か―」. 日本体育学会体育哲学専門分科会夏期合宿定例研究会〈特別企画〉(平成 18 年 7 月 23 日　於：箱根静雲荘).

⑦木庭康樹 (2006) プラトン哲学における身体論―ソーマ概念の体系的考察を通して―. 日本体育学会体育哲学専門分科会定例研究会 (平成 18 年 6 月 17 日　於：順天堂大学本郷キャンパス).

〔図書〕(計 1 件)

①木庭康樹 (2006) スポーツ科学事典.〔社〕日本体育学会監修, 平凡社, 409-410 頁 (総ページ数 2 頁), 執筆項目:大項目「身体運動」, 小項目「行動」「行為」「身体活動」(平成 18 年 9 月).

〔その他〕
本研究に関連するホームページ
「スポーツ哲学の最前線：平成 17 年度科研費・基盤研究 (B) の研究グループ」
http://www.geocities.jp/yuri20006/

６．研究組織
(1)研究代表者
木庭　康樹 (KINIWA KOHKI)
広島大学・大学院総合科学研究科・助教
研究者番号：60375467

(2)研究分担者

(3)連携研究者